

青年期後期における依存性の適応的観点からの検討

竹澤みどり* 小玉正博**

本研究では、不適応的・病的な現象として問題視されやすい依存を、一般的な対人関係においてより積極的で適応的なものとして捉え、そのような依存を測定するため、情緒的依存・道具体的依存からなる対人依存欲求尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを第1の目的とした。さらに、対人依存欲求尺度と、肯定的特徴として他者への信頼感がどのように関連するか、これまで依存的であることの特徴として考えられてきた自分への自信のなさや意思決定に対する自己評価の低さとの関連も含めて検討することによって、依存のより肯定的、適応的特徴を示すことを第2の目的とした。447名の大学生を対象とし、調査を実施した。因子分析の結果、情緒的依存・道具体的依存の2つの下位尺度からなる20項目の尺度が開発された。この尺度の信頼性と妥当性の検討を行ったところ、両下位尺度において十分な信頼性と妥当性が確認された。さらに、概ね対人依存欲求尺度と自己信頼感との間に有意な関連がみられなかつたが、女性においてはむしろ情緒的依存欲求が高いほど自己信頼感が高く、依存欲求が高い人は他者信頼感が高いという依存の肯定的・適応的特徴が見出された。意思決定に関する自己評価においては、情緒的・道具体的依存欲求どちらにおいても高い人は、自己評価が低かった。

キーワード：対人依存欲求尺度、情緒的依存、道具体的依存、信頼感、意思決定

問題と目的

これまで依存の問題は主に児童心理学領域において親子関係に焦点をあてた研究が多数積み重ねられ、各発達段階における依存の変化やその役割などが検討されてきた（例えば、Sears, Whiting, Nowlis, & Sears, 1953；Beller, 1955など）。その後、次第に青年期以降における依存の研究もなされるようになった（Kagan & Moss, 1960）。しかし、青年期以降の依存は退行的な心性として問題視されてきた（江口, 1966）。そのため、青年期以降を対象とした依存研究では、依存的な人は自信がなく、自己決定できないなど、その病理に注目したものが多い。例えば、依存の病理として問題とされているものとして依存性人格障害がある。DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994) では、依存性人格障害には自ら決断することができずに他人に任せてしまうという特徴が示されている。このように、不適応的、あるいは病的な依存は「自信のなさ」や「自分で意思決定できない」という特徴を有しているとされ、一般的に他者に依存することは問題であると思われがちである。しかし、問題なのは適切に機能しない依存、もしくは、過度になる不適応的・病的な依存である。

また、多くの対人依存に関する研究で用いられている Interpersonal Dependency Inventory (IDI : Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin, & Chodoff, 1977) では、依存は「他者への情緒的信頼」「社会的自信のなさ」「自立的主張」の3つの下位尺度から構成されており、「社会的自信のなさ」の高さが依存的な人の1つの特徴として扱われている。

しかし、健康な日常的な対人関係においては、依存は病的なものというより、適応的な役割を果たしていると考えることは不自然なことではない。むしろ、自己信頼感や他者信頼感があるからこそ他者にゆだねることができるのでないだろうか。他者や自分自身に対して信頼感を持つ人は、対人関係上の悩みが少なく、他者からの効果的なソーシャルサポートを享受できることが示されている（Grace & Schill, 1986）。また、青年期において特に友人との良好な関係の形成は、個人の人格的発達に大きな影響を与えるものであり（Collins & Repinski, 1994），人は情緒的サポートや具体的援助の提供という機能を友人が持つことを期待している（Argyle & Henderson, 1984）。友人がこのような機能を果たしうるためには、両者の間に信頼感に基づいた親密な人間関係が存在しなければならない。人は、自分や他者に対する信頼感があつて初めて、友人などの他者に頼ることができるのでないだろうか。つまり、誰かに頼りたいと思うのは、良好な互恵的対人関係の構築

* 筑波大学心理学研究科

takezawa@human.tsukuba.ac.jp

** 筑波大学心理学系

を前提としているからではないかと考えられる。この視点に立つと、互恵的対人関係において、他者に頼り、自分に必要なものを補うことはむしろ適応的であるとも考えられよう。

実際、依存の適応的意義に注目した研究もいくつかなされてきている。これらの研究は、各発達段階における依存の様相や構造を検討した研究と、依存と他の心理特性との関連を検討した研究に大きく分けられる。依存の構造を検討した高橋(1968, 1970)では、まず依存性を「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義している。そのうえで、依存は発達とともに変容しながらも存在し続けるものであり、自立の獲得・増大に必要なものであるとし、青年期における依存の積極的意義を示している。

これら高橋の研究をもとに、その後様々な研究がなされている。田中・高木(1997)は、中学生を対象として、依存要求(欲求)の内部構造を検討している。彼らは、依存要求(欲求)として「自分の要求(欲求)が、他者からの個別的あるいは具体的で道具的あるいは直接的な反応や行動により満たされる」道具的依存要求(欲求)と、「他者からの一般的あるいは抽象的で、心理的あるいは間接的な反応や行動により満たされる」心理的依存要求(欲求)を見出し、家族以外の「ソトの世界」(友人)という社会的な場面では、道具的依存要求(欲求)を強く抱きやすいという結果を示している。高橋(1968)は精神的な助力を他者に求める要求を「依存要求」として定義しており、田中・高木(1997)もこれに基づいて「依存要求」という言葉を用いている。高橋(1968)の尺度項目は、他者を心のよりどころにする程度や、他者に支えを求める程度を測定している。また、田中・高木(1997)の尺度項目も「～ほしい」という他者に求める程度を測定していることから、要求は欲求と同様の意味で使用されていると考えられる。今後、欲求レベルと行動レベルを区別して依存を扱っていきたいため、本研究では依存欲求という言葉を用いることとした。

一方、閻(1982)や久米(2001)は依存と他の心理特性の関連を検討し、自己の肯定度や安定性の観点から、依存欲求が特に否定的な意味をもたないことや、依存が積極的な意味をもつことを指摘している。

これらの研究は、青年期の依存を不適応や病理をもたらすものとして理解することは、必ずしも適切ではないことを示している。しかし、病的・不適応的な依存の特徴である、「自信のなさ」や「意思決定できないこと」と日常生活において生じる人に頼るという一般

的な依存との関連は、未だ十分検討されていない。そこで、病的・不適応的依存と強い関連が示されてきた「自信のなさ」や「意思決定できないこと」が、日常生活上の対人関係で現れる依存欲求とどのように関連するのかを検討することによって、依存の適応的な側面を示すことができるものと考えられる。

これまでの研究から依存は大きく2つに分けられる。Kogan & Moss(1960)らは、依存には「愛情・受容・保証の追及を強調する情緒的依存」と、「問題場面における援助を強調する道具的依存」という2種類があることを見出している。この概念を受けて、辻(1969, 1970)は、情緒的依存と道具的依存の2つの下位尺度からなる「依存性テスト」を作成している。さらに、田中・高木(1997)は、戸田(1984)の結果をもとに尺度を作成し、大まかに「道具的依存要求(欲求)」と「情緒的依存要求(欲求)」を見出している。以上のことから、依存には、「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得るという情緒的依存」と、「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする道具的依存」が存在することがわかる。しかし、それぞれの尺度にはいくつかの問題点が存在する。辻(1969, 1970)の尺度は、「知らない人の前でも平気で話ができる」「自分がやさしい人間だと思う」という項目が含まれ、辻(1969)の依存の定義に合わないと思われる。さらに、「親のいいつけは素直に守る」など、現代の大学生を対象とした場合には不適切と思われる項目が見られる。一方、田中・高木(1997)の尺度は依存要求(欲求)を測定しているにもかかわらず、その項目は因子によって状態を表す項目からなるものや、願望を表す項目からなるものなど、因子によって各項目が測定しているものが異なっているため、妥当性に対する疑義が指摘されている(田中・高木, 1997)。

また、高橋(1968)は、依存を道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求(欲求)と定義し、依存対象別の依存要求(欲求)尺度を作成している。さらに閻(1982)は、高橋(1968)の定義を参考にし、対象を特定化しない依存欲求尺度を作成している。これらの2つの尺度には道具的な依存は含まれていない。しかし、前述の研究からも依存には情緒的要素と道具的要素が含まれると考える方が妥当である。さらに、田中・高木(1997)は、友人や異性との関係において、道具的依存要求(欲求)を強く抱くことを示しており、友人や異性との関係が重要な青年期においては、道具的依存も何らかの重要な役割を担っていることが推測される。

青年期後期における情緒的依存と道具的依存の両方を含む対人依存欲求を測定するためには、新たな尺度を作成することが必要である。そこで、本研究では依存欲求を情緒的・道具的依存を含めた「是認、支持、助力、保証などの源泉として他人を利用ないし頼りにしたいという欲求」と定義する。

以上のことから、本研究の目的は以下の2つとする。第1の目的は、大学生を対象とした対人依存欲求を測定する新たな尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討することである。妥当性に関しては、併存的妥当性と基準関連妥当性の2点から検討する。併存的妥当性は、項目を参考にした関(1982)の依存欲求尺度との相関から検討する。関(1982)では情緒的価値を重視しているために、情緒的依存欲求とより強い相関が得られると推測される。情緒的依存欲求の基準関連妥当性に関しては、親和動機との相関から検討する。情緒的依存欲求の高い人は他者との情緒的なふれあいを求めて他者と接したいと考えるために、親和動機が高いと考えられる。したがって、両者の間には高い相関が示されると予想される。道具的依存欲求の基準関連妥当性は、実際のサポート希求行動との相関から検討する。道具的依存欲求の高い人は、何らかの問題に直面した際に、他者に対して具体的なサポートを求めると考えられる。したがって、道具的依存欲求とサポート希求との相関が高いことが予想される。

第2の目的は、依存のより適応的な特徴を捉えるために、依存欲求と適応感を表す一つの指標として捉えることのできる自己・他者への信頼感と自身の意思決定力との関連を検討することである。もし、依存欲求がその個人の不適応感とは直接的な関連がないとすれば、自己・他者信頼感や自身の意思決定力との間にはむしろ、肯定的な関連性があると考えられる。

方 法

調査対象者 都内の私立大学、愛知県内の私立大学、短期大学の学生計447名(男子243名・女子202名・不明2名)を調査対象とした。平均年齢は19.17歳($SD=1.23$)で、年齢の範囲は18歳から26歳であった。信頼性検討のため、そのうち56名には、約1ヶ月後に再テストを施行した。

調査時期 2003年6月上旬から7月下旬にかけて実施した。

質問紙 (1)対人依存欲求予備尺度：関(1982)の「依存欲求尺度」の13項目を参考にして依存欲求を測定する項目を作成した。さらに、関(1982)の尺度は“病気の

ときや、ゆううつなときには誰かに同情してもらいたい。”といった情緒的な意味合いの項目が多いため、道具的な依存に関する11項目を独自に作成して加え、計24項目からなる依存欲求予備尺度を作成した。回答は「6：いつもそう思う、5：しばしばそう思う、4：時々そう思う、3：まれにそう思う、2：めったにそう思わない、1：全くそう思わない」の6件法とし、それぞれの項目に対して普段どのくらいそう思うか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

(2) 依存欲求尺度：併存的妥当性を検討するために、関(1982)の尺度を用いた。この尺度は主に情緒的依存欲求を測定しているため、情緒的依存欲求との間のより強い正の相関が予測される。この尺度は13項目で構成されており、回答は「6：非常にあてはまる、5：あてはまる、4：少しあてはまる、3：余りあてはまらない、2：あてはまらない、1：全くあてはまらない」の6件法とし、普段の気持ちや考えに最も近いものを選択するよう求めた。

(3) 親和動機測定尺度：基準関連妥当性の検討のために、Hill(1987)の対人志向性尺度(Interpersonal Orientation Scale)26項目の日本語版である親和動機測定尺度(岡島, 1988)の下位尺度「情緒的支持(Emotional support)」7項目を用いた。この尺度は精神的に辛いときに誰かにそばにいてほしいという内容の項目から構成され、回答は「5：全くその通りだと思う、4：どちらかといえばその通りだと思う、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えば違う、1：全く違う」の5件法とし、それぞれの項目に対してどのくらいそう思うか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

(4) サポート希求尺度：道具的依存欲求の基準関連妥当性の検討のために、三浦・坂野・上里(1997)によるコーピング尺度のうち「サポート希求」下位尺度10項目を使用した¹。回答は「4：よくした、3：少しした、2：あまりしなかった、1：全くしなかった」の4件法とし、最近1ヶ月の間に、あなたが経験した最も嫌な出来事に対して、各項目に示す行動をどの程度行ったか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

(5) 信頼感尺度：天貝(1995, 1997)によって開発された、対人的信頼感を多次元的に測定するための尺度を用いた。この尺度は3つの下位尺度「不信」「対自的信頼」「対他的信頼」からなる。本研究では、「対自的信頼」下位尺度6項目、「対他的信頼」下位尺度8項目

¹ この尺度は中学生用に開発されたものであるが、その項目は学校場面に限られたものではなく、内容的にも大学生にも用いることができると思われたため、本研究で使用した。

を使用した。回答は「6：非常にあてはまる、5：あてはまる、4：少しあてはまる、3：余りあてはまらない、2：あてはまらない、1：全くあてはまらない」の6件法とし、今の気持ちや考えに最も近いものを選択するよう求めた。

(6) 意思決定に関する自己評価尺度：Radford・Mann・太田・中根(1989)によって開発された意思決定に関する自己評価尺度(6項目構成)を用いた。得点が高いほど意思決定における自己評価が高いことを示す。回答は「4：いつもそうである、3：時々そうである、2：まれにそうである、1：全くそうではない」の4件法とし、どのくらいそう思うことがあるか、あてはまる数字を選択してもらった。

手続き 各大学の講義時間中、集団形式で実施した。回答はいずれも無記名で行われた。

結 果

対人依存欲求尺度の因子分析

まず各項目の度数分布を検討した結果、平均+標準偏差が最大値を超える天井効果を示した1項目(項目1)を削除した。次に、残りの23項目に対して因子分析(主成分解・プロマックス回転)を行った。固有値の推移か

ら2因子解を妥当と判断した。共通性の低い(.20未満)項目を削除して同様の因子分析を繰り返し、その結果3項目(項目12, 14, 24)が削除され、20項目で2因子を抽出した。各因子の寄与率(回転後)は、第1因子36.56%、第2因子10.48%で、この2因子による累積寄与率は47.03%であった(TABLE 1)。

第1因子に含まれた10項目は「病気のときや、ゆううつなときには誰かになぐさめてもらいたい」「いつも誰かに見守ってもらいたい」など、自分が困っているときや悩んでいるときに他者と接触することによって情緒的な安心感を得たいという内容の項目であった。このことから第1因子は『情緒的依存欲求』と命名した。第2因子に含まれた10項目は、「何か対応に迷うようなときには、誰かに対応の仕方を聞きたい」「面倒な仕事は誰かに手伝ってほしい」など、何らかの課題達成のために他者から具体的な助言や援助を得ることによって課題達成の一助としたいといった内容の項目であった。このことから第2因子は『道具的依存欲求』と命名した。

対人依存欲求尺度の信頼性・妥当性

まず信頼性に関しては、下位尺度の情緒的依存欲求尺度は $\alpha=.89$ 、道具的依存欲求尺度は $\alpha=.84$ であり、

TABLE 1 対人依存欲求尺度因子分析結果(プロマックス回転)

項目	M	SD	F1	F2	共通性
情緒的依存欲求 ($\alpha=.89$)					
5 病気のときや、ゆううつなときには誰かに慰めてもらいたい。	4.07	1.51	.86	-.14	.63
13 いつも誰かに見守っていてもらいたい。	3.34	1.60	.82	-.14	.57
15 困っているときや悲しいときには、誰かに気持ちをわかってもらいたい。	4.19	1.43	.79	-.00	.62
10 悩み事があるときは、誰かにアドバイスしてもらいたい。	4.05	1.43	.78	-.00	.61
11 何かやろうとするときには、誰かにはげまされたり、気づかってもらいたい。	3.61	1.37	.75	.04	.60
9 できることなら、いつも誰かと一緒にいたい。	3.45	1.52	.72	-.04	.59
19 人から「元気?」などの気くばりの言葉がほしい。	3.12	1.52	.58	.08	.39
3 できることならどこへ行くにも誰かと一緒に行きたい。	3.70	1.39	.54	.10	.34
18 病気のとき、誰かに世話ををしてほしい。	4.13	1.47	.48	.14	.32
6 困っているときには、誰かに助言してほしい。	4.35	1.31	.47	.34	.50
道具的依存欲求 ($\alpha=.84$)					
22 何か対応に迷うようなときには、誰かに対応の仕方を聞きたい。	4.19	1.33	-.10	.80	.57
20 面倒な仕事は誰かに手伝ってほしい。	4.10	1.35	-.13	.80	.55
8 自分一人で片づけられない仕事があったときは、誰かに手伝ってほしい。	4.64	1.16	.01	.75	.57
7 むずかしい仕事を当てられるときには、誰かと一緒にいる方がよい。	4.47	1.37	.02	.74	.56
21 何か重大な知らせを受け取る場合には誰かそばにいてもらいたい。	3.88	1.50	-.02	.65	.41
23 体調が悪くなったときは、誰かに仕事を代わってほしい。	3.98	1.38	-.10	.58	.29
2 忙しいときには誰かに手伝ってほしい。	4.19	1.28	.12	.57	.42
17 自分一人で決断しかねるときには、誰かの意見に頼りたい。	3.98	1.48	.18	.46	.28
4 自分にはわからないことがあったら、誰かに教えてほしい。	4.73	1.13	.14	.44	.33
16 探し物をしなければならないとき、誰かに手伝ってほしい。	3.74	1.45	.23	.44	.34
寄与率 (%)				36.56	10.48
因子間相関				.52	

項目全体では $\alpha = .91$ と高い内的一貫性が示された。再テストの信頼性は、情緒的依存欲求 $r = .89 (p < .01)$ 、道具的依存欲求 $r = .71 (p < .01)$ であった。

次に対人依存欲求尺度の妥当性に関して述べる。本尺度の下位尺度と他の尺度との関連を検討するため、相関係数を算出した (TABLE 2)。情緒的依存欲求と関 (1982) の依存欲求尺度との相関係数は $r = .85 (p < .01)$ 、道具的依存欲求と関 (1982) の依存欲求尺度の相関係数は $r = .66 (p < .01)$ となり、情緒的依存欲求の方が高く、どちらも正の相関が認められた。次に、情緒的依存欲求と親和動機測定尺度の下位尺度である情緒的支持との相関係数は $r = .73 (p < .01)$ 、道具的依存欲求とコーピング尺度の下位尺度であるサポート希求との相関係数は $r = .27 (p < .01)$ となり、どちらも正の相関が認められた。

依存欲求の性差

下位尺度ごとに一元配置分散分析を用いて性差を検討した (TABLE 3)。その結果、情緒的依存欲求、道具的依存欲求とともに女性が男性よりも有意に得点が高かった (情緒的依存欲求に関しては、 $F(1,431) = 31.24, p < .001$ ；道具的依存欲求に関しては、 $F(1,434) = 7.61, p < .01$)。

TABLE 2 依存欲求尺度の下位尺度と他の尺度との相関係数

下位尺度—他尺度	n	r
情緒的依存欲求—関 (1982) の依存欲求	412	.85**
道具的依存欲求—関 (1982) の依存欲求	414	.66**
情緒的依存欲求—情緒的支持	428	.73**
道具的依存欲求—サポート希求	422	.27**

** $p < .01$

TABLE 3 下位尺度ごとの平均値および性差

下位尺度／性別	n	M	SD	F 値
情緒的依存欲求				
男性	233	35.46	10.32	31.24***
女性	200	40.81	9.46	
道具的依存欲求				
男性	235	40.95	8.76	7.61**
女性	201	43.23	8.38	

** $p < .01$, *** $p < .001$

依存欲求と自己・他者信頼感および意思決定に関する自己評価との関連

自己信頼感、他者信頼感および意思決定に関する自己評価尺度と情緒的依存欲求、道具的依存欲求の両下位尺度との相関を見たところ (TABLE 4)，情緒的依存欲求は、自己信頼感との間で $r = .11 (p < .05)$ ，他者信頼感との間で $r = .37 (p < .01)$ ，意思決定に関する自己評価との間で $r = -.17 (p < .01)$ であった。一方、道具的依存欲求は、自己信頼感との間で $r = .04 (n.s.)$ ，他者信頼感との間で $r = .20 (p < .01)$ ，意思決定に関する自己評価との間で $r = -.23 (p < .01)$ であった。

次に、性差を考慮して以下の分析を男女別に行った。情緒的依存欲求尺度得点の平均値 (男性 : 35.46, 女性 : 40.81), 道具的依存欲求尺度得点の平均値 (男性 : 40.95, 女性 : 43.23) をカットポイントとして低群・高群に分け

TABLE 4 対人依存欲求と信頼感、意思決定の自己評価との相関係数

	I	II	III	IV	V
I 情緒的依存欲求					
II 道具的依存欲求	.58**				
III 自己信頼感	.11*	.04			
IV 他者信頼感	.37**	.20**	.58**		
V 意思決定の自己評価	-.17**	-.23**	.50**	.25**	

* $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE 5 各群における自己・他者信頼感尺度、意志決定の自己評価尺度の平均値と標準偏差

	自己信頼感				他者信頼感				意志決定の自己評価			
	男性		女性		男性		女性		男性		女性	
	n	M (SD)	n	M (SD)	n	M (SD)	n	M (SD)	n	M (SD)	n	M (SD)
情緒的 依存欲求												
低群	120	24.20(5.36)	90	22.24(5.99)	118	31.41(5.69)	90	31.48(6.78)	119	15.73(3.48)	90	15.04(3.46)
高群	109	24.78(5.13)	104	23.95(4.26)	106	34.21(6.29)	101	35.81(5.55)	109	45.87(3.44)	106	14.17(2.98)
道具的 依存欲求												
低群	93	24.83(5.23)	101	22.92(5.98)	91	32.19(5.82)	98	32.81(6.86)	94	16.27(3.20)	101	15.09(3.23)
高群	136	24.18(5.27)	94	23.40(4.55)	134	33.18(6.29)	94	34.72(6.06)	135	14.61(3.56)	96	14.07(3.15)

た。欲求の高低を独立変数とし、自己・他者信頼感尺度、意思決定に関する自己評価尺度を従属変数とする分散分析を実施した。各群におけるそれぞれの尺度得点の平均値は TABLE 5 に示されている。

まず、自己信頼感の結果を述べる。分散分析の結果、情緒的依存欲求に関しては、FIGURE 1 に示すように、男性においては群間に有意な差は見られなかったが、女性においてのみ、高群の方が自己信頼感が有意に高かった ($F(1,192) = 5.34, p < .05$)。しかし、道具的依存欲求に関しては、男女ともに群間に有意な差は見られなかった。

次に、他者信頼感の結果を述べる。情緒的依存欲求においては、FIGURE 2 に示すように、男女ともに、高群の方が他者信頼感が有意に高かった（男性： $F(1,222) = 12.25, p < .01$ ；女性： $F(1,189) = 23.55, p < .001$ ）。ま

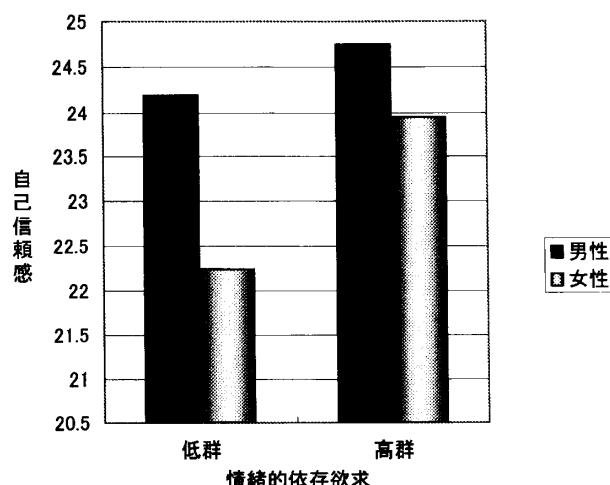


FIGURE 1 情緒的依存欲求高群・低群における自己信頼感

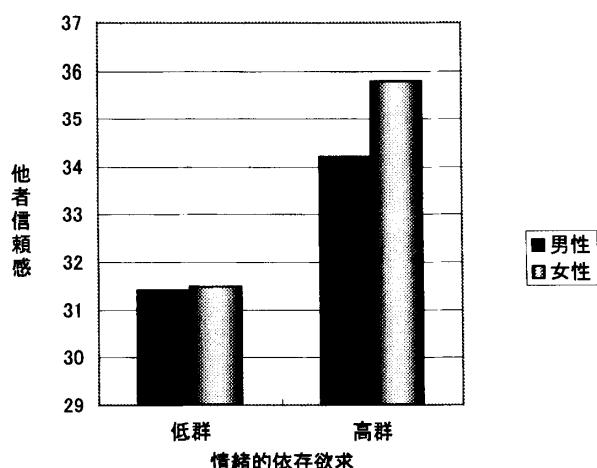


FIGURE 2 情緒的依存欲求高群・低群における他者信頼感

た、道具的依存欲求に関しては、FIGURE 3 に示すように、男性においては群間に有意な差は見られなかったが、女性においてのみ高群の方が他者信頼感が有意に高かった ($F(1,190) = 4.20, p < .05$)。

最後に意思決定の自己評価の結果を述べる。情緒的依存欲求に関しては FIGURE 4 に示すように、男女ともに、高群の方が意思決定の自己評価が有意に低い傾向があった（男性： $F(1,226) = 3.51, p < .10$ ；女性： $F(1,194) = 3.54, p < .10$ ）。また、道具的依存欲求に関しては、FIGURE 5 に示すように、男女ともに高群の方が意思決定の自己評価が有意に低かった（男性： $F(1,227) = 12.94, p < .001$ ；女性： $F(1,195) = 5.00, p < .05$ ）。

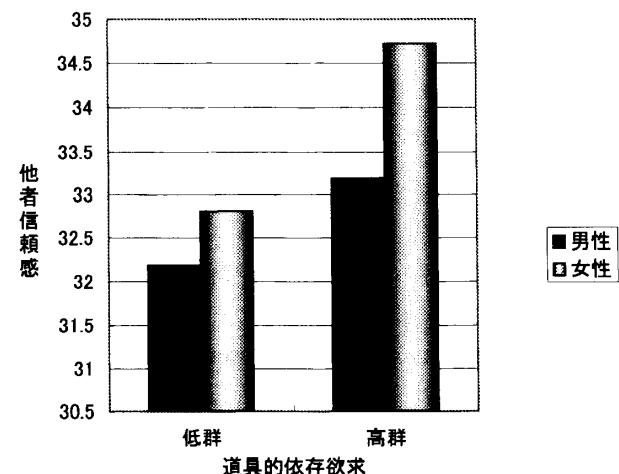


FIGURE 3 道具的依存欲求高群・低群における他者信頼感

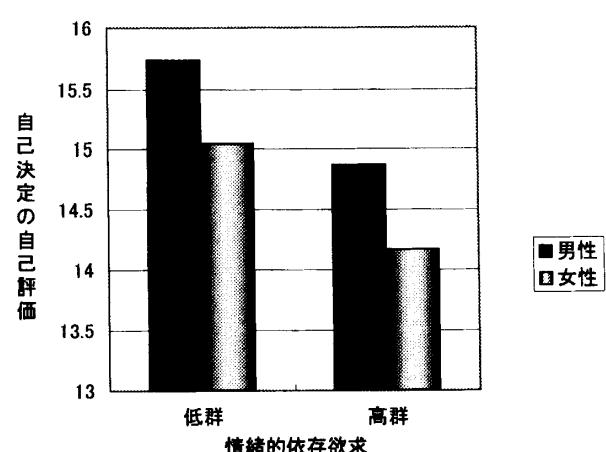


FIGURE 4 情緒的依存欲求高群・低群における意思決定の自己評価

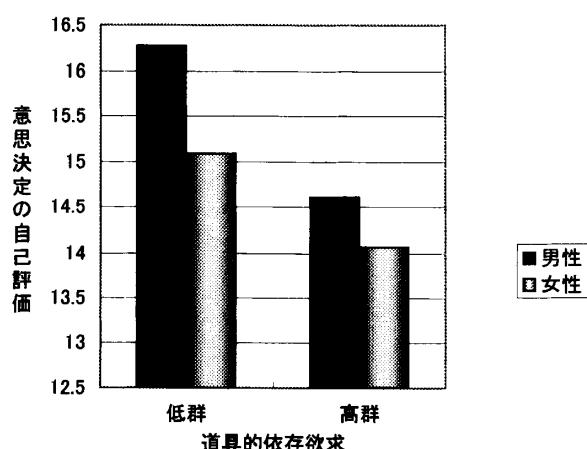


FIGURE 5 道具的依存欲求高群・低群における意思決定の自己評価

考 察

本研究の目的は、第1に青年期後期の依存の構造とその働きを検討するため、情緒的・道具的依存欲求を含む新たな対人依存欲求を測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することにあった。第2に、この尺度を用いて依存欲求の高低と自己・他者信頼感、意思決定に関する自己評価との関連を検討することを目的とした。以下これら2点について考察する。

対人依存欲求尺度

対人依存欲求尺度は、全20項目で情緒的依存欲求・道具的依存欲求の2つの下位尺度で構成された。

尺度の信頼性に関しては、Cronbachの α 係数と約1ヶ月後に実施した再検査によって検討され、いずれの下位尺度においても十分な信頼性が確認された。さらに、対人依存欲求尺度の両下位尺度と閔(1982)の作成した依存欲求尺度は、それぞれ正の相関を示したことから、尺度の併存的妥当性が確認された。道具的依存欲求に比べて情緒的依存欲求尺度との相関が高かった。これは、閔(1982)の依存欲求尺度は情緒的意味合いが強いためであると考えられる。情緒的依存欲求は、自分が困っている時や悩んでいる時に、他者と接触することによって情緒的な安心感を得たいという欲求である。情緒的依存欲求の高い人は、情緒的な支持を得ることを目的とした親和動機の一つである「情緒的支持」(Hill, 1987)も高くなると考えられた。そのため、親和動機の情緒的支持尺度との関連から、情緒的依存欲求下位尺度の基準関連妥当性を検討した。その結果、情緒的依存欲求と親和動機の情緒的支持との間に中程

度の正の相関が見られた。次に、道具的依存欲求は、何らかの課題達成のために他者から具体的な援助を得たいという欲求であり、道具的依存欲求の高い人は実際に問題場面に遭遇した際に、サポート希求という対処行動をとりやすいと考えられた。そのため、サポート希求尺度との関連から道具的依存欲求下位尺度の基準関連妥当性を検討した。その結果、道具的依存欲求とサポート希求との間に中程度の正の相関が見られた。以上のことから、両下位尺度の基準関連妥当性が確認された。

情緒的依存欲求尺度の項目は、自分が困っているときや悩んでいるときに他者から支持や是認を得たい、または一緒にいることによって情緒的な安心感を得たい、という欲求を表している。この因子の中に、「悩み事があるときは、誰かにアドバイスしてもらいたい」という具体的な援助を求める項目が含まれていた。この項目は、悩み事を抱えているときに他者からのアドバイスを得ることで、自分自身の不安が軽減したり、心強さを感じるなど情緒的な安定を得ることができる意味していると考えられ、この項目は情緒的依存といえる。また、道具的依存欲求尺度の項目は、他者から具体的な助言や援助を得ることで課題を達成したいという欲求を表していた。両者は、他者から何らかの生産的な反応を得たいという欲求であるという点では類似している。しかし、前者は他者と接することによって情緒的な安定を得ることを目的としており、後者は何らかの課題達成のための具体的な一助を得ることを目的としているという点で異なるといえる。

対人依存欲求の性差

情緒的依存欲求、道具的依存欲求の両尺度ともに性差が認められ、男性よりも女性の方が依存欲求が高かった。従来から、依存欲求に関しては男性よりも女性が高いという結果がある一方で、性差が認められない研究も多く、結果が一貫していない(湯川, 1979)。今回の結果は、女性の方が依存欲求が高かったが、必ずしも男性の依存欲求が低いとは言い切れない。なぜなら、男性の場合、社会的場面においては地位や独立を重んじる傾向が指摘されており(Tannen, 1991)、他者に頼ることは望ましく思われない。そのため、質問紙上ではその回答が歪んでしまうことも考えられる。また、女性と男性では依存の表現の仕方が異なることも考えられるが、両者の依存の質的な差異は未だ検討されていない(湯川, 1979)。そこで、今後は、性役割意識を考慮して依存欲求の性別による質的差異を検討することが必要である。

依存欲求と自己・他者信頼感、意思決定に関する自己評価との関連

自己信頼感に関して、依存欲求の高群と低群の間には、概ね差は見られなかった。しかし、女性においてのみ、情緒的依存欲求の高群は低群に比べて自己信頼感が有意に高かった。この結果は、これまでの不適応的な（未熟な）依存の考え方とは異なるものであった。すなわち、これまででは、自分に自信がないために、他者に依存的になり、他者がいないと不安になってしまうと考えられていた。しかし、本研究の結果からは、日常的な対人関係における依存欲求の場合、自己に対する自信のなきが情緒的・道具的依存欲求を高めるとは言えない。女性においてはむしろ、情緒的依存欲求の高い人は自己への信頼感が高いことが明らかになった。理由としては以下のことが考えられる。女性は対人関係において相互依存や自己開示に価値をおく（和田, 1993）ため、女性にとっては人を受け入れたり、人に受け入れられたりすることは重要なことである。自己信頼感は自分を他者から受け入れられるに足る存在であるという感覚につながりやすいと考えられる。そのため、自己信頼感の高い女性は、自分が拒否されるのではないかという懸念が低いために頼ることへの躊躇が少なく、情緒的依存欲求も高くなると考えられる。しかし、本研究では、因果関係は明らかでないため推測の域を出ない。今後は因果関係を含めたさらなる検討が必要である。

次に他者信頼感と依存欲求との関連について考察する。分析の結果、概ね情緒・道具的依存欲求の高い人は、他者信頼感が高かった。このことは、他者に高い信頼感を持つ人は、他者を頼るに足る存在と認識するためと考えられる。これまで、依存の一側面として他者への過度な信頼が挙げられてきた。しかし、本研究における情緒的依存欲求高群、道具的依存欲求高群の他者信頼感得点はとともに、天貝（1995）による大学生の他者信頼感得点と大きな差はないことから、両依存欲求高群の他者信頼感得点は、過度に高いとはいえない。むしろ、他者への信頼感の高さは、社会生活を営む上で個人の適応を良くすることから、依存欲求の高い人は他者への信頼感が高いという適応的な特徴を持ち合わせているといえる。一方で、男性においては、道具的依存欲求の高低で、他者信頼感に違いがみられなかった。なお、男性に関しては後に、自己・他者信頼感と合わせて考察する。

以上のことから、依存欲求の高い人は自己や他者への信頼感を持ち、それらの信頼感をもとに他者と信頼

関係を築くことのできる人である可能性が示唆されよう。

本研究では、情緒的依存欲求に関しては、信頼感との関連がみられた。これに対し、道具的依存欲求に関しては、女性において他者信頼感との間に関連がみられたのみにとどまり、信頼感との関連はみられなかつた。情緒的依存欲求は、他者との情緒的つながりを求めるものである。情緒的つながりを感じるためにには、人に受け入れられていると感じることが重要であると考えられる。人に受け入れられるためには、自分が人に受け入れられるだけの価値があるという感覚を持ち、さらには自分を受け入れてくれるという感覚が必要である。前者の感覚は自己信頼感であり、後者の感覚は他者信頼感にあたり、情緒的依存欲求には両者の信頼感が大きく影響を与える。一方で、道具的依存欲求は、人とのつながりよりも、課題の達成のために具体的援助を得ることが目的であるために、情緒的依存欲求ほど信頼感の影響は受けにくいと考えられる。

また、男性に関しては、他者信頼感と情緒的依存欲求との間に関連がみられたのみで、あまり依存欲求と信頼感の間には関連がみられなかつた。男性と女性における、他者に依存するということの質的な違いを考慮に入れて検討することが必要である。

最後に、意思決定に関する自己評価と依存欲求の関連について考察する。なお、意思決定に関する自己評価においては、情緒的・道具的依存欲求どちらを従属変数とした分散分析でも、男女によって結果に違いがみられなかつたため、男女含めて考察することとする。分析の結果、情緒的依存欲求の高い人、道具的依存欲求の高い人はいずれも、意思決定に関する自己評価が低く、この傾向は道具的依存欲求の方がより強かった。具体的に何らかの決断をしなければならないという場面においては、より具体的な援助が必要となるため、道具的依存欲求とより強く関連したと考えられる。また、自己信頼感と意思決定における自己評価との間には中程度の相関が存在したが、両者と依存欲求との関連は逆の方向性を示すものであった。基本的には自分を信頼していても、意思決定に関しては自分の考えだけでは心もとないといった場合に、依存欲求が高まると考えられる。つまり、自分の能力において足らない部分を他者に依存することによって補うということが、一般的な対人関係における依存の適応的機能であると考えられる。しかし、本研究からは、なぜ依存欲求の高い人において意思決定に関する自己評価が低いのかという原因を断定することはできない。今後は面接調

査などを用いて質的に検討することが必要である。

今後の課題

本研究では、質問紙調査によって、依存の適応的側面を、対人関係の一側面である信頼感から検討した。今後は、男女間の依存の質的差異を含めて、依存欲求の高い人(または低い人)が、実際にどのようなプロセスを経て依存を表出し、その結果、他者との関係性や自己にどのような影響を及ぼしているのか、さらに、各プロセスにおいてどのような要因が依存を規定していくのかを、面接調査などの質的研究を含めて依存を包括的に検討することで、青年期における依存の適応的側面をより詳細に明らかにすることが必要であると考えられる。

引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371. (Amagai, Y. 1995 The effect of trust on ego-identity of high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 43, 364-371.)
- 天貝由美子 1997 成人期から老年期にわたる信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響— 教育心理学研究, 45, 79-86. (Amagai, Y. 1997 A study on the development of trust in adults and elderly individuals. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 45, 79-86.)
- American Psychiatric Association 1994 *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV*. Washington, D.C.: Author. 高橋三郎・大野 裕・染谷俊幸 1995 DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- Argyle, M., & Henderson, M. 1984 The rules of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 221-237.
- Beller, E. K. 1955 Dependency and independence in young children. *Journal of Genetic Psychology*, 87, 25-35.
- Collins, W. A., & Repinski, D. J. 1994 Relationships during adolescence : Continuity and change in interpersonal perspective. In R. Montemayor, G. R. Adams, & T. P. Gullotta (Eds.), *Personal relationships during adolescence*. Thousand Oaks, California : Sage Publications. Pp.7-36.
- 江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58. (Eguchi, K. 1996 Dependency : Empirical evidence and theoretical re-examination. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 14, 45-58.)
- Grace, G. D., & Schill, T. 1986 Social support and coping style differences in subjects high and low in interpersonal trust. *Psychological Reports*, 59, 584-586.
- Hill, C. A. 1987 Affiliation motivation : People who need people ... but in different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1008-1018.
- Hirschfeld, R. M. A., Klerman, G. L., Gough, H. G., Barrett, J., Korchin, S. J., & Chodoff, P. 1977 A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, 41, 610-618.
- Kagan, J., & Moss, A. H. 1960 The stability of passive and dependent behavior from childhood through adulthood. *Child Development*, 31, 577-591.
- 久米禎子 2001 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- 三浦正江・坂野雄二・上里一郎 1997 中学生用コーピング尺度短縮版作成の試み 日本心理学会第61回大会発表論文集, 358.
- 岡島京子 1988 親和動機測定尺度の作成 日本教育心理学会第30回大会発表論文集, 864-865.
- Radford, M. H. B. • Mann, L. • 太田保之・中根允文 1989 個人の意思決定行為と人格特性(第1報)—ある大学の学生を対象として— 実験社会心理学研究, 28, 115-122.
- Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V., & Sears, P. S. 1953 Some child-rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genetic Psychology Monographs*, 47, 135-236.
- 閔知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 臨床心理事例研究, 9, 230-249.
- Tannen, D. 1991 *You just don't understand : Women and men in conversation*. New York : Ballantine Books.
- 高橋恵子 1968 依存性の発達的研究 I—大学生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 7-16. (Takahashi, K. 1968 Dependent behavior in female

- adolescents : I. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **16**, 7-16.)
- 高橋恵子 1970 依存性の発達的研究III—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性— 教育心理学研究, **18**, 65-75. (Takahashi, K. 1970 Dependent behavior in female adolescents : III. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **18**, 65-75.)
- 田中 優・高木 修 1997 中学生における社会的依存要求の特徴について 社会心理学研究, **12**, 151-162. (Tanaka, M., & Takagi, O. 1997 Features of social dependency demand in junior-high school students. *Japanese Journal of Social Psychology*, **12**, 151-162.)
- 戸田弘二 1984 大学生における愛着構造について 日本心理学会第48回大会発表論文集, 556.
- 辻 正三 1969 「依存性テスト」の検討 東京都立大学人文学報, **67**, 11-33.

- 辻 正三 1970 「依存性テスト」の検討(第2報) 東京都立大学人文学報, **77**, 17-33.
- 湯川隆子 1979 性差 藤永 保・藤原喜悦・梶田叡一・佐伯 胖・多田俊文・高橋恵子(偏) 児童心理学の進歩, **18**, 金子書房 Pp.237-265.
- 和田 実 1993 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75. (Wada, M. 1993 Same-sex friendship : Effects of sex-role type. *Japanese Journal of Social Psychology*, **8**, 67-75.)

謝 辞

本論文は、筑波大学心理学研究科に提出した2001年度修士論文の一部を再分析したものです。本研究にあたり、調査にご協力頂いた皆様に心より感謝を申し上げます。

(2002.10.20 受稿, '04.5.24 受理)

Development of an Interpersonal Dependency Scale : A Positive View of Dependency

MIDORI TAKEZAWA (DOCTORAL PROGRAM IN PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND

MASAHIRO KODAMA (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 310-319

In the present study, we conceptualized immature and non-adaptive dependency as active and productive. Our first purpose was to develop an Interpersonal Dependency Scale, and to examine its reliability and validity. Our second purpose was to reexamine the concept of dependency by investigating the relation between self-confidence and self-evaluations regarding personal decision-making ability. A 20-item Interpersonal Dependency Scale (IDS), consisting of 2 sub-scales (Affectional Dependency and Instrumental Dependency) was developed, based on a factor analysis of 447 college students' responses to a questionnaire. Both Cronbach's alpha coefficient and test-retest correlations were sufficient to support the reliability of the Scale. Affectional Dependency and Affiliation Motivation, as well as Instrumental Dependency and Support Seeking, were positively correlated. These findings suggest that the Scale has high construct validity. Participants who reported high dependency tended to report trusting others more. In particular, women who reported high dependency tended to show more self-confidence. These findings suggest that dependency has positive aspects. Conversely, participants who reported high dependency had low evaluations of their decision-making ability.

Key Words : Interpersonal Dependency Scale, affectional dependency, instrumental dependency, trust, adults